



論文とわたし

「これは科学技術論文であって、新聞記事ではない」

卒論原稿を指導教員に提出したとき、赤字で帰ってきたコメントの印象が強く残っている。正確な文言は忘れたが、このような意味であった。論文書き出しの一行目に、いきなりの駄目出し。どういう表現だったか。文章の末尾で「(…に) 衝撃が走った。」と書いた気がする。

さまざまな現象があり、なんでそんなことが起こるのかと疑問を感じ、じゃあやってみようということになる。「なんで」は、人によって強弱や色合いが異なる。なんだか「衝撃が走った」のは間違いないし、それが引き金となって、今も弾丸となって飛んでいる気がする。最終稿では消えた「衝撃」という単語に思いを馳せる。

○

それにしても、論理的な文章作成技術は、一朝一夕で身につくものではないと痛感する。近道はない。無意識に場数を踏めば良いというものでもない。その逆で、意識的に経験を蓄え、地道に一步一步というのが実感である。

これまでの浅い経験を通じ、「論文」とは何かと問われれば、「複数の構成要素を最適に配置したもの」と答えたい（ここでいう論文とは、査読付き論文を指す）。この最適配置は、論文全体、個別の文章、図表、引用文献の細部にまで過不足なく行き届いている必要がある。

乏しいデータセットであっても、上記の最適配置が堅実になされた場合、おそらくそれは論文になる可能性がある。誤解してはいけないのが、豊富なデータがあっても、それを材料として最適配置しなければ論文にはならない、という点だ。これは、学生に限らず、研究している際に陥りやすい落とし穴だと思う。

たくさん実験した結果を、生データのまま羅列した表、何の意図か不明な図のまま不可解に配置された状態で見せても、それは自己満足であって、論文と呼べる代物ではない。この流れを汲むならば、博士号とは、自己満足から論文完成を経験した者に与えられる称号といえる。

○

ところで、論文執筆に臨む際に、どこでデータセットを区切るべきか。この点、研究者や分野でかなり異なるように思う。測定したデータ群は連続している場合が多々ある。しかし、論文には文字数という制約がある。

ウェブ投稿が当然の世代に研究を始めた者としては、サポートに本文からはみ出した図表や文章を載せることはよく使う手である。ただ、100ページを超えるサポートの付いた論文をダウンロードしたときは、さすがに驚いた。

論文のコンテンツは、文章、図表以外にも音声、動画、生データシートも含まれるようになった。白黒は絶対ではなくなり、カラーを効果的に利用した論文も増えた。デジタル化できさえすれば、あらゆるものがデータとして利用可能といえる。

そのようなデジタルファイルを受け取る個人用ハードディスクの容量も、メガ、ギガ、テラとどんどん増加している。膨大なデータの海で溺れないように、どこかで区切る必要がある。制約を設ける必要がある。時間は有限だ。

○

森 銑三という碩学がいる。誰も読まない古い時代の忘れられた文献を読み込み、無名の日本人を再発見した。明治生まれとは思えないほど、現代でもその文章は読みやすく、書いてある情報は読んで初めて知ることばかり。エッセイを読めば、図書館と蔵本への深い愛情がうかがわれる。

和紙に墨で書かれたものを読み、雑多に散らばったものを一カ所に集約させ、原稿用紙に手で書く。そして修正する。編集して、本にする。徹頭徹尾アナログである。しかし不思議と、静謐な図書館の机を前にして、無限のデータが森 銑三の頭の中を渦巻いている様子が浮かぶ。

埃を被った数多の古文献を掬い出し、それらを綺麗に磨いた彼の地道な仕事がなければ、私は数多くの面白い市井の人たちを知ることはできなかったと思う。

何か見過ごしてはいないだろうか。忘れ物はないだろうか。目の前にある当たり前の事象を、大切にしているだろうか。森 銑三の著書を読むとそういう気持ちにさせられ、励まされている。

○

ひとりの人は万のデータを凌駕する存在であると感じる。わたしの存在こそが最も複雑であり、そこから表出した論文は、わたしの存在のほんの一部分に過ぎない。名前を持った人間が研究を行っていることを忘れてはならない。

常識という価値観に囚われずに生きること。ほんの些細なことでも関心を向けることは、想像以上に難しい。煩雑な業務に急かされるような生活を乗り越え、今後も研究から貰った「衝撃」を追い続けたいと願っている。

末尾に、今回の執筆機会は国立環境研究所の松神秀徳さんから頂きました。次回は、放射光実験でお世話になっている徳島大学の山本 孝先生に託しました。

〔京都大学大学院地球環境学堂 藤森 崇〕